

拝啓 おとうちゃん

農業 寒河江 京子



おとうちゃん、貴方が天国とやらへ赴かれて五年目ですネ。

仁（長男）も恵介（二男）も、それぞれに頑張っています。

……………でも今年の天候には負けそうです。例年なら五月の初めにはトウキビの種が蒔けたのに雨ばかりで一カ月も遅れてしまいました。七月に入りサフランポの収穫の今、また雨降りと曇りが交互の日ばかりで、スカッとした日本晴れはどこへ行ってしまったのでしょうか……………捜しに行こうか、と思います。知っていたら教えてください。

サフランポもぎをしながら、一本の木なのに枝が上向きか下向きかで実の大きさが随分違うことに気づきます。もちろん陽当たりの良いところは味も良いのです。今年になってようやく剪定の仕方です。実の成り方が違つことも分かってきました。今、三年後にはもつともつと実が大きく、美味しいサフランポが採れるようになろうと、心は燃えています。

百姓って工夫の連続だ、と私は思います。失敗に繋がることもあるけれど、成功することだつてある。自分で工夫しながら自由に生きていける職業だと思えます。

おとうちゃんも応援してください。目標を達成した時は、生きていた頃のように褒めてくださいネ。貴方に褒められることが、最大のエネルギーになりましたもの。「ソソでもいいからホメてください」。そうお願いした私に、まだいつものことかと、余り心も込めずに褒めてくれましたネ。それでもいいんです。やる気が起きれば。

サフランポもリンゴも、それぞれに性格があります。「桜伐るバカ」という言葉がありますが、あれもソソですネ。サフランポの場合はやつぱり伐り方で実の成り方が違いますもの。自分で体験してみなければわからないことです。「三年後には、きつと良い実が成る」と、念仏のように唱えながら梯子を昇ったり降りたりしています。

おとうちゃんが、剪定の途中で



▲NHKの“北海道中ひざくりげ”二見アナウンサーはじめスタッフの人達と。
一週間のおつきあいでしたがそれなりに楽しかったです（中央が筆者）。

入院してしまつて、何本かの木がそのままになったものですから、高い高い木になつてしまつたといふわけです。

志津子（長男の嫁）さんの話では、直売所に立ち寄つてくれた何人もの人から「トウキビは、まだなの？」と聞かれたそうです。憶えていてくれる人がいるということとは嬉しいことですよね。トウキビのように「紅果園のリンゴ」「紅果園のサクランボ」と、愛されるよう頑張らなければと思つています。直売所の二代目は、仁と志津子さん。私は初代に徹し、今は剪定作業や収穫作業に力を入れています。

おとうちゃんは、一人の孫もその手に抱くことが出来ませんでしたネ。「同じ病院だから、孫が生まれたら一番早く顔が見られる」と言っていたのに……………。あと一カ月生きていれば、耕平（孫）の顔が見られたのに……………。

昨年は一入目の夏生が生まれ、来年の一月には三人目が生まれる予定とのこと。賑やかになります。貴方の姿が消えてから…………他人

にも逢いたくない、何にもする気のない日が続きました。そんな時いつも夢の中に出てきてくれましたネ。嬉しかったし勇気も湧いてきました。でも死んだ後まで心配をかけてはいけないな、と思いました。ゴメンナサイ。

おとうちゃん、最近、二人の山本さんと知り合いになりました。二人に共通しているのは、女性で文筆家だということ。その一人の山本さんは、今年四月から日本農業新聞に連載の、「窓を開けて」（相続問題に関しての特集）の取材で知り合った山本和子さん。我が家に泊まっていたんだけど、本社へ電話や機械で記事を送りながらの慌ただしい一晩でした。

その「窓を開けて」を読んでいくうちに、同じような立場の人達が親の死んだあと、残つたのはイザゴザばかりと知り、黙つてはいられなかつたから「何も残らなくてもいいと言う仏様のような人ならそれでもいいかも知れないが、息子たちも農業をやりたいとなれば、それも言つてはいられない」と、

▼直売所二代目の志津子さん。
リンゴをかごに盛っているところ。



▲いろいろなお客様たちと。
時には外国の人も来ます。

そんな思いを農業新聞にブツ付け
た時、取材に来てくださったのが
山本和子さんでありました。
もう一人の山本さんは、一字違
いの山本洋子さん。この人と知り
合ったのは四年ほど前になります。
直売所の台に、リンゴが並んで
いた時季でした。日も暮れて、買
つてくれる人も疎らになつたし
「店じまいをしようかなあ」と思
つていた時、一筆三百円のリンゴ
を買つてくれたのが山本洋子さん
でした。
私は、彼女にリンゴを渡しながら、
自分の育てたリンゴへの思い
をしゃべりました。その時だけで
なく、自分の作つた物売る時
には、いつでもその物への思いをお
客さんに伝えていまして……。
私の勝手なおしゃべりを聞いて
いた彼女は、名刺を出しながら、
「私、これでもラジオの番組を持っ
てるの、あなたのことラジオでし
ゃべつてもいい？」と聞いてくれ
ました。その二日後、『北海道味と
旅』の編集長として、ラジオから
彼女の声が流れていました。

寒河江 京子（さがえ きょうこ）さん

1939年留萌郡小平町生まれ。1959年北海道農
村青少年クラブ道連役員となり1961年寒河江
良治さんと結婚。1969年から“むかしとうき
び”の直売所を始め1994年10月NHKテレビ
「北海道中ひざくりげ」の中で紹介される。
北海道回覧ノート「北のやまびこ」会員。
ミニ独立国「ロマンカントリー大江国」の一
人、地元のボランティア活動に参画。
（お住まい 048-24 余市郡仁木町大江3丁目
「紅果園」Tel 0135-33-5403. Fax 33-5260）

一人の山本さん、偶然にも文章
を書くのがご職業の一人。彼女た
ちと知り合うキッカケは何だった
のだろうと考えてみます。
それは、道端のペンペン草のよ
うに、踏まれても踏まれても頭を
もたげる百姓魂だったのではない
かと思えます。生まれも百姓、嫁
いだところも百姓、百姓が嫌いだ
と思つたことはありません。
百姓という職業を卑下したりは
しません。愛する職業、百姓とし
て一生を終わるはずですから。
それでいいのですよね……………、
おとうちゃん。